

社交不安と遅延価値割引との関連について

池 田 正 樹

I. 問題と目的

社交不安症とは、他者によって注視されるかもしれない社交状況に関する顕著なまたは強烈的な不安である。社交不安の維持、増悪の要因として、コストバイアスや予測バイアス、社会的場面からの回避や安全確保行動等が関連するとされている。また、これらは衝動性との関連が示唆されており、衝動性の指標である遅延価値割引との関連を検討することを目的とした。

II. 方 法

4年生大学に通う男女（男性20名，女性20名，平均年齢 20.13 ± 1.54 歳）を対象とした。質問紙はLSAS-J（朝倉他，2002）、日本語版SIAS（金井他，2004）、日本語版SFNE（笹川他，2004）、SCOP（城月・野村，2009）のコストバイアス尺度、日本語版STAI（清水・今栄，1981）の特性不安尺度を用いた。実験課題としてスピーチ課題と価値割引課題を実施した。価値割引課題では、Green et. al. (1994)と同様の方法で主観的等価点を算出し、そこから双曲線モデルを用いて割引率（ k ）と曲下面積（AUC）を算出した。

実験では初めに質問紙に回答してもらい、その後実験の要旨を説明した。その後スピーチ課題を実施し、スピーチを1分30秒行った時点で遅延価値割引課題を実施してもらい、その後スピーチをもう1分30秒してもらった後に実験の詳細を説明した。

III. 結果と考察

実験協力者全員の内、手続き上のミスや値の欠損、質問紙の得点が平均より+1SD以上離れている者を除いたデータについて統計分析を行った（報酬 $n=29$ ，罰 $n=36$ ）。

Brunner-Munzel Testを行った結果、遅延報酬課題におけるLSAS合計得点の高群と低群で k の値に有意差が見られた（Brunner-Munzel Test Statistic = -2.1224 ， $df=26.999$ ， $p<.05$ ）。また、ピアソンの積率相関を用いて分析を行った結果、報酬の価値割引課題における k の合計値とLSAS（ $r=.446$ ， $p<.05$ ）、SIAS（ $r=.400$ ， $p<.05$ ）、STAI特性（ $r=.529$ ， $p<.01$ ）において有意な中程度の相関がみられ、SCOPとの間に有意な低い相関がみられた（ $r=.392$ ， $p<.05$ ）。

これらの事から、社交不安の程度やコストバイアスの程度と遅延価値割引課題における衝動性との間に関連性がみられることが示唆された。